

みなと 物語



災害とたたかう港区 ～室戸台風～

昭和に入り、港区は度重なる台風の被害や戦争の災禍にみまわれました。

昭和9年(1934年)9月21日、近畿地方一帯を襲った室戸台風は港区にも大きな被害をもたらしました。大阪港では暴風と荒れ狂う高波のため、沖合に繫留(けいりゅう)していた5,000トン級の汽船数隻が港内に押し流されて、大棧橋に激突。その凄まじい衝撃で、大棧橋はその先端から234メートルが引きちぎられ、流失してしまいました。また、せまりくる高潮は港区全域をのみこみ、浸水は最高水深2.2メートルを記録し、まちは泥の海と化しました。浸水は、一部地区を除いて2日から5日間続き、なかでも南



築港岸壁へ打ち付けられた汽船
(市立図書館蔵)

市岡小学校付近などは10日間も水がひきませんでした。被害は甚大で、区内の死傷者・行方不明者は1,000人を越え、家屋の流失・全壊や床上浸水など罹災家屋は約44,000戸にのぼりました。

とりわけ、台風の襲来が午前8時頃と登校時であったため、木造校舎倒壊等による学校での被害も



避難先から我が家へと帰る人々(市岡中学校(現在の市岡高校)前付近)
「写真集 明治大正昭和 大阪 上(ふるさとの思い出 310)」国書刊行会

甚大でした。このため、その後建てられた湊屋小学校、磯路小学校は鉄筋校舎となりました。また港郵便局や築港警察署、港消防署といった官公署の建物も鉄筋による建築がすすめられました。そして港区役所も、昭和12年9月に現在の場所に移転の際には、鉄筋の庁舎として建設されました。



港区役所旧庁舎(昭和12年9月建設)